

中國古代史研究の近況

一 殷虛の考古學的研究

林 巳 奈 夫

本誌十一卷近刊業欄で御承知のごとく中國考古學報、歷史語言研究所集刊が入つて、安陽發掘報告四冊に報告されてゐる以後の殷虛發掘の様子が大分わかるやうになつた。どんな論文にどれだけのことが記されてゐるかその項目のあらましを次に紹介して研究者に一讀をおすすめしよう。

まづ、中國考古學報（即田野考古報告）第二冊（民三六年）所載、石璋如「殷虛最近之重要發現、附論小屯地層」が擧げられる。殷虛發掘小史ともいふべき序文についで、八・九・十三・十四・十五各次發掘の經過が述べられ、（十一・十二次侯家莊殷墓發掘は稿を改めて記す由）次に「二、最近の重要問題の發現及其相關之問題」の興味深い章が来る。青銅礎板について。次は、車、馬、戰士を伴つたM〇二〇墓につき、車制、戰鬪單位としての戰車と戰士等の復原が試みられる。また騎射の風のあつたことも、卜辭資料も使つて推測。殷虛にお

ける版築の手順、水溝の問題。「基址墓葬與殷代的宗教儀式」の節では基址とそれに關係深い墓葬の位置關係を分類し、昆明の民俗と對比して、それゝが建築の進行と共に供せられた、人間、動物の犠牲なるを論ずる。次は青銅器鑄造法、骨牙器の雕り方、金薄製作法等技術方面の問題。「甲骨諸藏及其材料的來源」については、甲と骨を區別して穴に納れたこと、管理人を同じ穴に埋めたこと、かく穴に埋めたのは王朝交替の時の整理のためだらうこと、及甲骨の材料の來源の問題等につき論ずる。器物各説。帶釉の（帶釉陶器は宰村からも出たといふ）豆や、漆器ではないかと推測してゐる曇らしい器の黃土中の壓痕、等が特に注目される。章が改つて、黑陶時代層と殷商時代層の分布層位關係。殷商文化に屬する遺蹟の種類。（墓葬の種類は細かく分類される。）殷商以後の遺蹟、即ち、黃土講、子供を納れた合口甕棺、隋墓、唐、宋、明、清墓等、最後に「小屯與洹濱諸遺址的關係」の節。遺

蹟所在地列挙、各々の主要發見物等を記入した一覽表。彩陶、黑陶、小屯各文化層の概括。住居の立地等。

寫真版は模糊として役に立たぬが、凸版の地圖、M〇二〇の平面圖、器物の圖等は使へる。

なほ、中國考古學報第四冊（一九四九年）に、右の論文の後記が載せられてゐる。「基址墓葬與殷代宗教儀式」の節に關し、建築の進行に伴ふ供式、その意義、及殷代の三牲を改めて論じ、また、字骨を多數出したH一二七と他の灰坑との關係を併せ記してゐる。

歴史語言研究所集刊第十三本、（民三十七年）には、石璋如「河南安陽後岡の殷墓」がある。民三二年、二三年に發掘の行はれた後岡の大墓一、小墓五について記す。小墓は無形墓と長方形墓に分類。前者としてH三三二。破壊されて形を失ひ、骨粉の外、戔、鏃、爵、觚、銅鏃、が散亂。底に丹砂らしき層。H三六二は副葬品なく、灰土坑中に俯身葬。後者としてはH三二一A墓を記す。深さ三・二五米、縦三・二米、横一・七米の穴の中に、横一・三米、縦二・五米程の厚さ一〇厘位の板を組合せた櫛室を作り、その中央真下に四〇厘に七〇厘、深さ一五厘の穴を更に掘り込む。（腰坑）東部は盜掘されてゐるが、櫛室に、陶、鬲、銅鏃、戈尾、鳥骨、人骨。腰坑に狗骨、具、櫛室外に人骨二體銅甗を出す。H三二一Bも同式だが保存は更に悪い。大墓にはH三四〇墓がある。深さ九米程のやゝ下すばみの長方形をなす穴に、前より紹介せられてゐる如き豆形木室（五・七米×四・四米）を納れ、中央に腰坑、此に約一一米の階段、南に長さ約二〇米の斜路を作つたもの。二回の盜掘で主要な遺物は殆んど失つてゐる。腰坑より出た犬の鈴は、革ひもので吊し、舌を麻紐で下げた様子がわかり面白い。南道の途中のやゝ平になつた處より車器が若干。尙ほ北道の直上

に戰國時代の墓。（この時代の墓は安陽に多數ある由）。次にこの墓の遺物について記されてゐるが、熊に似た白大理石體雕刻、麻龜の甲で作つた細長い片、圓い片、など目新しい。後者は濬縣辛村、小屯にもあるといふ。墓室を埋めるに當つて土を舂き固めながら、隨時人間の首を斬つて放りこんだ様子が、その分布、狀態よりわかるのは興味深い。新舊二回の盜掘について考察を加へた後、かゝる墓の營造の順序を推測してゐる。

中國考古學報第三冊（民三十七年）第四冊（民三十八年）に李濟、「記小屯出土之青銅器」上篇中篇がそれぞれ載せられてゐる。上篇は「容器的形制」と題される。「一、出土情形」の章では資料たる小屯の十墓につき、副葬人骨の姿勢、數、より、殉葬や信仰關係の犧牲らしいこと。また層位關係、副葬品より確かに殷商時代に屬することを論ずる。「二、分類説明」。器の最下部の形態により1、鬲足器（斗）2、平底器（鍋、壘）3、圈足器（盤、尊、觚、方彝、甗、卣、罍、甗）4、參足器（鼎、罍、爵、盃、甗）5、肆足器（罍、爵）6、與器相失之蓋に分類。「殷虛陶器圖錄」の總説を引用、序數による形態命名法を説明、この命名による各形式のやゝ詳細な説明。「三、參足器在小屯殷商期演變之段階」では、參足器の足部、底部の形態を精しく分類研究し、鼎の形の何れが古いのか、爵、罍の形の變遷、甗と盃、罍、爵の栳甗と鼎の耳の由來等の問題を形式學的に論じ、殷代の工人は黑陶の形制を熟知してゐたが、模倣はせず、改良取捨して工夫を加へた、として、黑陶と殷商時代銅器の形のギャップを説明してゐる。「四、圈足器的原始」、これに屬する十式の内、彝の外は皆殷虛土器中に見出され、相互の形の差は少いといひ、各式の由來を研究。銅製のものは陶製のものを模したらしいことをいふ。「圈底器 平底器、四足器及蓋」の章で

は、これらの由來を、疊は彩陶時代より、銅經典の鏃等に。四足方形器木製器より、斗、割つた葫蘆に柄をつけたものより、等と。「六各器之相互關係」。小屯十墓を鼎壘甗の有無より甲乙二類に分け、各墓に屬する各種器の形式の新古を研究、一墓のフンドが被葬者と同時代だと假定すれば、これは埋葬の新古の順序づけたるを論じ、次に各フンド中の爵罍盞等の容量の比を調べ、經典のそれとあまり一致しないことを見出してゐる。

中篇は「鋒刃器」と題され、利器の研究である。「一、分類の説明」の章ではⅠ尖器（針など）Ⅱ端刃器（離刀、鏟刀、斧斤）Ⅲ邊刃器（刀の類）Ⅳ雙刃器（甲句兵（矛）（乙）刺兵（矛）（丙）長兵（鏃））に大きく分類。Ⅰ尖器以外は、各々を更に細かく分類個々の遺物につき説明（圖版寫真あり）が試みられる。「二、說刀削」。先に發表した斷面丁字形の小刀は石双骨背のものより發達したのではないかとの推測は、柄刃の區別不分明な青銅小刀及長方形骨製刀背の發見により裏づけられると。柄の發達は重要改革といひ、有柄刀を三つに分類、凸背凹刃のものは石器の鏟より。凹背凸刃のものは刮刀より。直背凸刃のものは上の一分支とし、殷虛資料を使つてそれらの形式の發展系統圖を作成。また鑄造法を考察。問題の獸頭刀については、形式上、鑄造技術上、今の發達系統の最後に續き、また殷代に、物の端末に獸刀を飾る好尚のあつたことより、中國で發生したもので、北方民族はこれを引きついだと考へる。「三、句兵溯源」。三つの問題に分けて考察。(1)、直内と曲内と内的關聯ありや、起原別なりや。——兩式の内の形式の先後を論じ、曲内はその中の鳥形文様と密接に關聯。鳥形を納れる要よりと。(2)、上下欄と側欄——玉銅合製の構造は、石器時代、石戈をソケットにはめて使つた時の遺制。上下欄はこのソケットに起源。側欄は、援の中

背の柄に接する部分の發達したもの。(3)、舌狀的援末與尖銳的援末、——前者は、石器玉器に端刃、邊刃を兼ねたものがあるが、かゝるものと戈とを折中しようとして、失敗に終つた試み、と。(4)、不見於小屯句兵的現象。——胡なし、刃をつけた内なし、側欄未發達の三つをあげる。「四、鏃形の演變及其在地面下分佈之狀況」の章では、各處出土の銅鏃の寸法を測り、統計的に援つてゐる。幾つかに分けた組の差異、系數大なるものは、長期に亘つたものと。「五、墓葬與灰坑關係一面」。青銅製禮器は墓より、甲骨は灰坑より出る。鋒刃器西方より出土する故、兩者の關係認められる、と論じ、具體例を列舉。

なほ右論文に關聯して、集刊二二本（民三九年）に、李濟が「豫北出土青銅句兵分類圖解」を書いてゐる。(1)、導言、先の論文の、中篇に句兵の起源を論じた續きで、豫北出土の資料を以て、このもの、殷中期から戰國末までの變遷をたどる。安陽小屯、同侯家莊、濬縣辛村、輝縣琉璃閣、汲縣山彪鎮の遺物が資料である。(2)、形態分析の章。小援與胡、胡殷以後に發達。(3)、内、曲内有鋸のものは殷代のみ。戰國代、内端に刃。(4)、援内之間、側欄辛村より。上欄又は下欄一方のみのもの戰國時代。等と結論。(5)、各組類別。出土地別の組に分け、各組を更に分類表示。(6)、全體分類的標準、句兵の各部分の時代による相異を研究。内、上下欄及側欄、刃の形を標準に總分類表を作成。(7)各式説明。各形式につき各部分の有無、寸法の比等の詳細な表。(8)、時代的範圍與幾個尙待解決の問題。各式の時代の範圍大體決めうること。以上より、外國の影響によらぬ、中國獨自の獨創的發展見うること。上欄のない戈の出現は、矛との組合せによる戟の發明によるのではないか、等とこの論を終る。寫真及凸版の圖が有難い。

集刊二二本（民三九年）所收、石璋如「小屯殷代的成套兵器」（附

殷代的策)も著者の議論より、そこに見出される新資料の方で興味を惹かれる。「(一)、前言」、時代により戰士の裝備する一セットの兵器に差あり。殷代のそれ如何。「(二)兵器出土の情形」例のM二〇の車坑の四セット、M一六四、M二三八各一セットの各々の出土状況を説明。

「(三)、兵器分述與復原」まづ弓。甲、籍載中の弓制。各部名稱、所用の材料、製造過程につき、周禮等の古典、四川省現代の例より研究。乙、殷代弓的復原。甲骨文の弓、彈、弣、射の字よりその形を視、金文圖形文字中の弓をもつ人間の像より、人體と弓の大きさの比例を出す。殷代の弓、牛角を使用、殷墟出土の多數の牛角も弓の材料か、と。次に「河南安陽遺物の研究」圖版二六中に見る如き一種の遺物の、M二〇中の出土位置より、これを弓の弣と決定。次は附。從來旂鈴、馬額飾等といはれてゐた金具を、弓の中央の握りにつく附となす新説。次は矢。籍載、現代四川の例よりその制を研究した後、殷代の弓の制を字形、現代例より推し、先に求めた弓の長さ、矢の重心等の方からその長さを推算。次は箠。甲骨文箠字の形、日本の例より研究を進め、鐵の出土状態、その附近にあつた戈に残る編竹様壓痕を考察、玉獸頭、長玉管を貫いた柄を附し、復原圖を作成。戈。これもまづ字形より研究次に出土状態より。長〇九九五米、長經〇・〇三六米、短經〇・〇二六米の、周圍に紅色漆皮の残つた土中の橢圓形空洞から、戈の柄のわかるのは面白い。また玉管を飾つた房飾りを想像復原。盾。詩經などに、戰車に盾をのせたこと。金文字形よりその形を想像。出土品より木框、中は皮質、表は褐色の漆で相向ふ虎の裝飾をつけた盾なるを知る。刀。想像の要なし。鞘はあつたかの問題につき、刀を鞘に納め、礪と共に環に下げた様を想像復原。礪と墜について、礪にひもを通して下げた蚌泡を墜といったことを論ず。「(四)兵器の等級與用途」兵器

の形、文様により、使用者の身分の高下あつたこと、また、裝備する兵器の目方を總計。重いのは車上、次は馬上、次は歩兵、等の別あつた、と。附殷代的策、では、兩端に玉を裝し、途中は黄金を被らせた長さ約六〇厘の棒に復原しうる器を策となす。

楊鍾健、劉東主「安陽殷墟之哺乳動物群、補遺」『中國考古學報第四冊』にも注目すべき事實が見出される。殷墟出土動物の種類、資料の數量等の表が示され、その内の新加資料として、現在中國南方にある種類の狐、現代の家猫に近い猫、(家猫と決定する證なし)現代熱帯にゐる犀牛、獐、等が興味をひく。考古學報第三冊に殷墟出土として楊氏が紹介してゐる北方寒冷地に住む扭角羚、及、鯨、象と共に、この犀牛、獐は遠方からもたらされたもの、といふ。水牛は腫面豬西不像鹿と並んで、千以上の最大の量をなしてをり、これは安陽の氣候が現在と同じくなかつた明證だ、といつてゐる。

以上を以て主要な論文の紹介を終る。